

長編小説

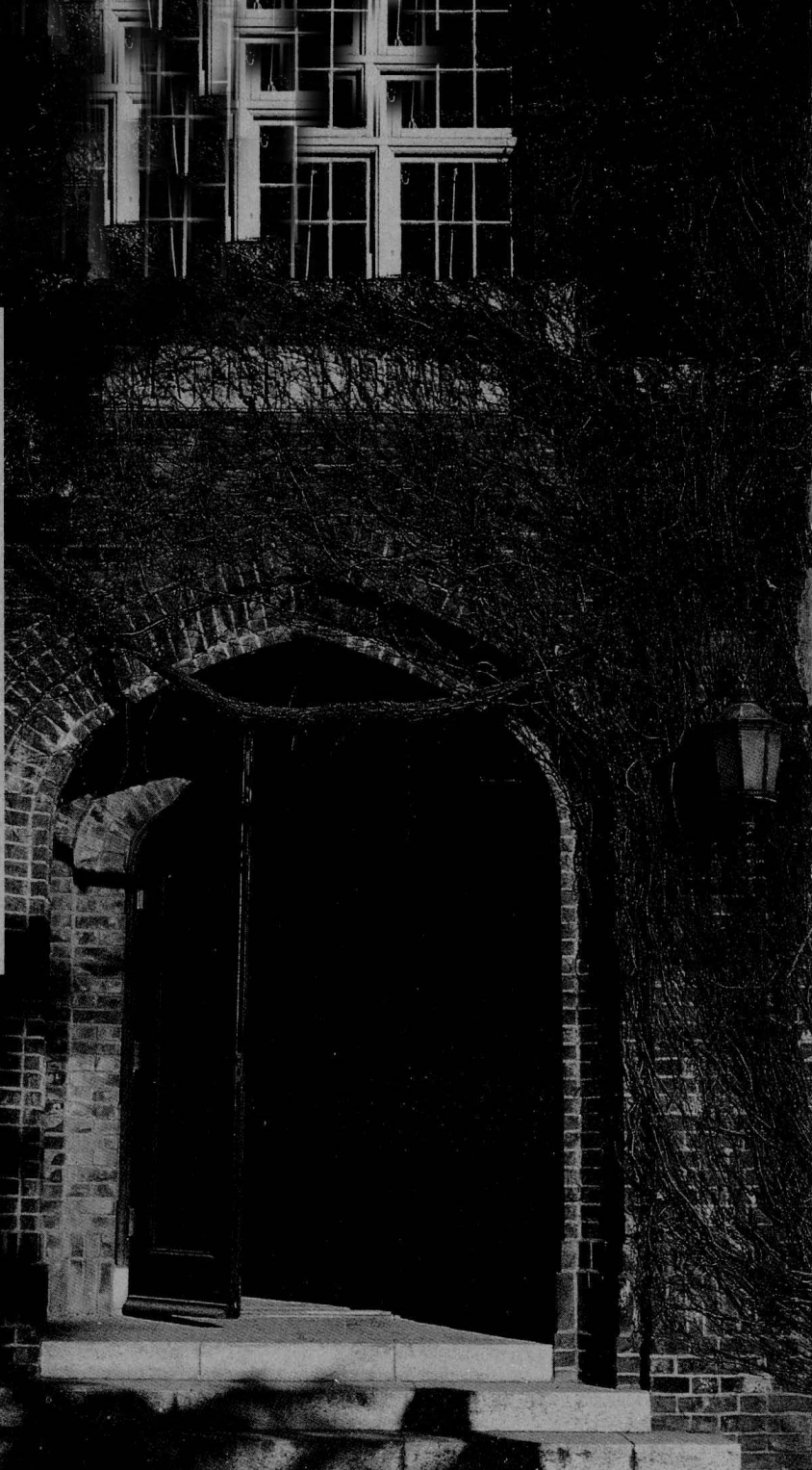
それぞれの門

三好徹



長編小説

それぞれの門
二好徹



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―二三
(郵便番号112)

光文社 文芸編集部

長編小説 それぞれの門

一九八一年 三月二〇日 初版第一刷発行

著 者 三 好 徹

発行者 小 林 武 彦

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二―二三／郵便番号 112
電話 東京(〇三)九四二―二二四一(代)
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 公 和 印 刷

製本所 関 川 製 本

定価 一、一〇〇円

それぞれの門——目次

男	夫	追	悩	消
と	と			え
女	妻	う	む	る

118	85	57	31	7
-----	----	----	----	---

未知の門	誇りと情熱	旅立ち	陰謀	決意
------	-------	-----	----	----

装
幀
辰
巳
四
郎

それぞれの門

三好
徹

消える

車内放送の車掌の声で、景浦^{かげうら}三郎は目をさました。東京駅に到着するギリギリの時間まで、そんなふうに眠っていたのは彼ひとりらしい。周囲の乗客たちは、コートを着こんだり、荷物を棚から下ろしたりしていた。

列車は新橋をすぎて有楽町にさしかかっていた。日は暮れかかっており、さまざまなイルミネーションが息をふきかえしはじめている。正月休みでビル群の排ガスが減ったせいも、いつもより空気が澄んでいるような感じだった。イルミネーションの輝きも鮮やかである。

それを目にして、三郎は、ああ、東京へ戻ってきたのだ、と思った。しかし、それは喜びとか満足ではなく、しいていうなら、身の置きどころに困るような空虚さに近いものであった。もちろんそれは東京へ戻るたびに感ずるというわけのものではなく、年に一度か二度、帰郷の旅を終えて東京へ戻ったときに限られていた。帰郷以外の用件で東京をはなれ、そして舞い戻ってきたときには、むしろほっとするくらいだった。

同じように東京へ戻るのに、どうしてそう違うのか、つきつめて考えたことはなかった。大学に入ったときから数えると、すでに十五年の東京暮らしが続いている。年月の長さからいえば、第二の故郷といってもいいようなものだが、この大都会に、そういうあたたかみのある思いを持つことはできなかった。

といって、三郎は、東京がきらいというわけではなかった。むしろ雑駁な活気にみちた部分は好きであった。二十四時間営業の盛り場にある食堂や、そこへ集まってくる人たちが働いている若者などに、声をかけたいような親近感を抱くのである。裏日本の小さな都会である故郷の町にも、そういう店があればいいのに、と思うこともあるのだ。

もっとも、それは三郎がいいと思うだけで、故郷の人たちが賛成するとは思われなかった。現にこんどの帰郷でも、三郎の恩師である沼田六平老人は、三郎からその話を聞いて、

「そんな店ができたら困るな。わしは、絶対に反対するぞ」

といったものである。

「先生、いけませんか」

「いかん。断じていかん」

老人らしい一徹さで、沼田はいった。

「先生、どうして断じていかんのですか」

「二十四時間営業ということ、夜なかの三時でも四時でもやっていることだろうが、人間というものは、そういう時間にはちゃんと眠っておるべきものなんだ」
「しかし、東京というところは、そんな時間まで働いて腹をへらす人もいるんです。そういう人たちにとっては安直で便利なんです」

「理屈はやめとけ。そんな下らんことを考えるより、自分の身のまわりのことを心配した方がいい。どうして再婚しようとしなんだね？」

六平は三郎の痛いところを突いた。

急に自分のことに話が変わって、三郎はうろたえた。まして、どうして再婚しないのかなどという話は、もっとも敬遠したいものだった。

「どうしてといわれても困るんですが……」

「わしはお前のことを思っているのだ」

「それはわかっております」

「もしよかったら、わしが新しい嫁さんを世話しよう。」

じつはな、とても氣立てのいい娘さんで、わしの古い友人が……」

「先生、そういう話は、またこの次にうかがうことにして、きようはほかに行くところが……」

三郎はあわてて腰をうかした。黙っていれば、写真を見せられた上、場合によっては、その娘さん呼び寄せかねないのである。ここは、三十六計逃げるにしかず、

という感じであった。沼田六平は、そういう三郎の心中を見ぬいてか、

「そうあわてて帰らんでもいいじゃないか。せめて写真だけでも持って行けよ」

「それもこの次にします」

「そうか」

六平はちよつと口ごもつてから、思い切ったように、
「やっぱり前の奥さんが忘れられんか」

といって、目をしばたいた。

「そんなことはありません。そうじゃなくて独身が続けているのは、生活の問題です。予備校の教師の給料では、東京は物価も高いし、暮らしていけないからです。いづれ余裕ができれば、お願いに上がりますよ」

三郎は早口にそういって、沼田の家を辞去したのだったが、その言葉はすべて、いいのがれであった。

もしも沼田が三郎の月収を知ったら、目をむいて驚くに違いなかった。むろんそれは、額が少ないからではなくて、その逆である。沼田が老齢と病氣のために、教育界を去ってから十年以上たっていた。沼田の頭のなかにある予備校は、昔のままであった。予備校は、成績のいい生徒のためにはまったく不必要な存在であり、その教師もまた二流のもので、と思ひこんでいるのだ。

三郎は、恩師のそういう無知に乗じて、縁談をかわしてきたのだったが、真実というなら、再婚をせずに独身

を続けているのは、別れた妻の香代子の方がやはり大きな理由であった。

二人の結婚生活は約一年で終わった。香代子と別れてから、もう三年になる。もともと、別れたという言い方は正確ではなかった。香代子が一方的に三郎から去ったのだ。

香代子がいまどうしているか、三郎はある男から聞いている。その男というのは、城南大学の講師で、三郎が教えている恵泉進学ゼミナールの教師をアルバイトにしている岡原だった。

岡原からその話を聞いたとき、三郎は、自分の顔色が変わるのを意識した。

銀座の高級クラブのホステスをしている、というのである。

香代子の消息を伝えた岡原は、彼女が三郎の妻だったことを知っているのではなかった。ある受験雑誌の編集長といっしょに飲みに行った店で、三郎のことを知っているホステスがいたと話したのだ。

「お喋りしているうちに、ぼくが恵泉ゼミの教師をアルバイトにやっていることを、つい話してしまっただんな。そしたら、その美人のホステスが、恵泉ゼミなら、自分にも知り合いがいるというんだよ。誰だってたずねたら、はじめは口をつぐんでいたが、最後には、白状した。つまり、あんたの名前をいったわけさ。あんな美人を知っ

ているなんて、あんたも隅に置けないね」と岡原はひやかすようにいったが、三郎には心当たりはまったくなかった。

「そんな銀座の高級クラブなんて、足を踏み入れたこともないが、何か人違いしているんじゃないかね」

「シラをきくこともないじゃないか。景浦三郎という先生がいるでしょう、と彼女は、はっきりいったんだぜ。もともと、どうして知っているのかと聞いても、笑ってばかりいて答えてはくれなかったが……」

「こっちは、まるで覚えがないが、何という女性かね？」

「本名かどうかかわからないが、たしか、香代子というホステスだったな。松坂慶子に似た感じの美人だよ」

と岡原はいったのである。

それなら香代子に間違いなかった。他人にそういわれたことは、しばしばあったのだ。当の香代子は、

「いやねえ」

と眉をひそめてみせたが、それが決して本心からのものではないことを感じとっていた。なぜなら、香代子の化粧は、松坂慶子に似せるように努力している、と思われるてならなかったからだ。

「やっぱり図星だったらしいな。こんど、ご馳走してもらわなくちゃ」

岡原は、わざとらしくはしゃいでみせたが、三郎の表

情が硬ばっていることに気づくと、それ以上は何もいわずに、彼の肩をどんと一つ叩いて、その場をはずした。

三郎は、そのあとを追いかけて、何というクラブだったか、本当は聞いてみたかった。

だが、彼は唇をかみしめて、その場に立ちつくした。胸の奥に火をつけられたようになっていた。

その火を消すのに、かなりの努力を必要とした。そしてようやく消したと思つたころ、沼田六平によつて再び火をつけられてしまったのだ。もともと、岡原にしろ沼田にしろ、悪意があつて、そんな話題を持ち出したわけではないことは、はっきりしていた。ただ、三郎としては三年たつてもふつ切れずにいる自分がいまいましかつた。もしばつたり香代子に出会つたら、どうなることであらうか。

香代子と話し合いの上で別れたのであれば、三郎も不消化の感情をもてあますことはなかったはずだった。しかし、そうではなく、ある日いきなり彼女は、三郎のいないすきに、身のまわりの品を持って出て行つた。

そのことを思い出すと、苦いものがこみあげてくる。さすがに前ほどではなくなっているが、苦い味に変わりはない。

(正月そうそう、どうもいかなん)

三郎は自分にいい聞かせて、列車の席を立ち上がった。気がついてみると、とうに東京駅に到着しており、乗客

の大半はとくに下りていた。

三郎は棚から旅行鞆を下ろすと、最後にプラットホームに下り立った。

正月休みを終えて東京へ戻ってきた人たちで、プラットホームはごったがえしていた。一度に階段を下りきれずに、渦を巻くような状態になっている。

足もとを見ながらその渦の中に入つて、ようやく国電の乗りかえホームに出たときだった。ふと顔をあげた三郎は、視界の端に何かひどく気になるものが映つたのを感じた。

十メートルほど離れた反対側を足早に歩いて行つた女が、香代子に似ていたように思えたのだ。

三郎は足をとめた。女はサファイアミンクのコートを手にとつていた。もはや後ろ姿になつていて、顔は見えない。

(まさか……)

ついさっきまで、彼の胸の中にわだかまっていたので、そういう錯覚に陥つたのであろう。ミンクのコートの女が香代子であるはずがない、と三郎は思つた。

彼女が出て行つたとき、三郎の経済状態はあまり芳しいものではなかった。そのとき勤めていた私立高校の給料は、世間一般の標準からみて、平均よりやや低いという程度だったのだが、出費の方が多すぎたのだ。

香代子がつけて出たのは、その前日に渡した給料の半

額だけだった。英文タイプの技術を身につけているので、生活するくらいは何とかできるだろうが、高価なミンクのコートを買えるはずがない。

(いや、そうじゃない)

三郎は自分のうかつさに気がついた。香代子は銀座の高級クラブで働いているというのだ。彼女の美貌をもつてすれば、金持ちの客にミンクのコートを買わせるくらいは、難しいことではないかもしれない。

三郎は国電の方へ進む乗客の流れから出て、新幹線のプラットホームへ行こうとしているらしいミンクのコートのあとを追いかけてしようとした。

そのとき急ぎ足でできた男の手にしていた金属トランクの角が、三郎のひざを打った。

「こりやどうも失礼」

痛さにかがみこんだ三郎に、男は謝った。

その声に聞き覚えがあった。

「あんた、大丈夫ですか」

と流行遅れの金属性のトランクを持った男はなおもいった。

もはや間違いはなかった。その声は、恵泉進学ゼミナールの常務理事をしている箱崎のものであった。

三郎は、ひざをさすってから、ようやく立った。箱崎にも、ぶつけた相手が誰だったのか、このときになってわかった。

「なんだ、あんただったのか」

三郎は苦笑した。

「なんだ、あんたか、とはひどいですね。痛かったですよ」

「いや、すまん。つい急いでおったものだから失敬した」

「これから旅行ですか」

「うむ、急用でな。ああ、もうベルが鳴っている。じゃ、これで」

どこのプラットホームのものかはわからないが、ベルが鳴っていることは確かだった。

箱崎はトランクを持ちなおして、階段の方へ立ち去った。何が入っているのか不明だが、かなり重いものらしく、箱崎のからだは上下に揺れた。

箱崎は恵泉ゼミの経理を握っている実力者だった。職員給料なども、彼が決めているという噂である。重そうにしているトランクを手伝って運んでやれば、それなりのご利益はあるかもしれないという気がしたが、ひざの痛みは消えていなかった。前にスキーで痛めたことがあり、その部分にトランクの角がぶつかったようだった。それに追うとすれば、箱崎よりも香代子を追うべきであったが、彼女らしく思えたミンクの女性は、とうに視界から消えていた。

三郎は、足をひきずるようにして歩きはじめた。一番はすれの乗りかえホームまで歩くのがおっくうになり、

そのまま八重洲口からタクシーを拾った。

三郎の借りている部屋は、東京タワーのよく見える鉄筋四階建ての三階だった。個人経営のマンションで、公庫融資を得ているために、室料は付近の相場よりも安い。向こう五年間は、その値段で賃貸しなければならぬという条件で、建て主が公庫から融資を受けたのだ。

一階の郵便箱には、かなりの郵便物がたまっていた。

三郎がそれを取り出しているとき、一階に住んでいる塩川が顔を出した。塩川は建て主の親類で、管理人をかねている。

三郎は、新年の挨拶をした。塩川はそれに答えて、しきりに頭を下げながら、

「つい三十分くらい前でしたが、お客さんがたずねて見えませんでしたよ」

「客ですか」

「ええ、中年の品のいい婦人でしたよ。うちへ見えて様子をきかれたので、遅くともきょうまでには帰るよう聞いています、とお話ししておきました……」

中年の品のいい婦人に、心当たりはなかった。

三郎の住居に、人がたずねてくることは、めったになかった。以前は必ずしもそうではなかった。香代子と結婚していたころは、郊外の公団住宅に住んでいたが、そのころは、土曜日の夜などに若い同僚の教師がやってきて、徹夜パーティーを楽しんだりしたこともあるのだ。

そういうとき、香代子は決していやな顔はしなかった。コーヒーをいれたり、夜食を作ったりして、来客をもてなした。独身の春川という体育の教師などは、

「奥さんの手料理の方がマージャンよりも楽しみですよ。景浦さんは本当に羨ましいな」

といって、香代子を嬉しがらせたものだ。

だが、香代子が去り、高校を辞めていまの所に移ってからは、客のくることはめったになかった。といって、三郎が仲間はずれにされているとか、同僚からきらわれているというわけではなかった。人を招来したりされたりする親しい関係が、いま勤めている恵泉ゼミでは生まれてこないのだ。

教師の大半は、高校か大学に勤めている。ゼミの講義は、いわゆるアルバイトだった。かれらは、高校や大学の授業の空白時間を利用して恵泉ゼミへやってくる。そして、授業をすませると、さっさと帰って行く。

三郎のように、恵泉ゼミ専属の教師は、十人にみたなかった。その人たちも、たいていは四十歳以上で、三十代は三郎ひとりであった。休憩時間に顔を合わせても、短い会話をかわすだけで、高校時代のように昼休みに将棋をさしたり、いっしょに下校して駅の近くでコーヒーをのんだりすることもないのである。要するに、人間同士のふれ合う場がほとんどないといつてよかった。

そういうなかで、わりあいにつきあいがあるのは城南

大学の岡原だった。年齢が近いことや、三郎が城南大学出身というせいもあった。だが、岡原と顔を合わせるのは、週に一度であり、たまにプライベートな話をするとはあるが、それ以上のつきあいにはならなかった。だから、三郎の住居に來客がないのも、当然のことであつた。

留守中にたずねてきた婦人が誰なのか、三郎にはまるで見当がつかなかった。

彼は管理人の塩川に札をいってから、三階の自分の部屋に入つた。

部屋はすっかり冷えきつていた。彼はコートを着たまふストーブに火をつけ、その前にかがみこんで、からだをあたためた。暮れに出かけるときは、掃除をしないで出たのだ。

そっくりそのままの状態だった。当然のことなのだが、何かしら腹立たしかった。

それから一時間かけて、三郎は部屋の中を片付けた。そしてコーヒーをいれて一口のんだとき、プザーが鳴つた。

ドアをあけると、中年の和服の婦人が立っていた。相手が塩川のいつていた客であることはすぐにわかつた。たしかに、上品で優雅だった。

婦人は、白い華奢な手を動かして肩にかけていたミンクのストールをぬぐと、

「あの、景浦先生でいらつしやいますか」といって三郎を見つめた。長いまつげの、一瞬はつとするような大きな目だった。

「はあ、そうですが……」

三郎は記憶をまきぐつたが、会つたことのない顔だった。もし一度でも会つていれば、忘れそうにない雰囲気をもっている女性だった。彼女は身かがめて会釈してから、

「わたくし、副田邦子と申すものでございますが、じつは、息子の通つております高校の春川先生から、景浦先生のことをうかがひまして、ここに春川先生のお手紙も持つて参つております。ちよつとお願いしたいことがございまして、まことに突然で失礼とは思ひましたが、こうしてお邪魔したようなわけで……」

春川の名前を耳にしたとき、三郎はいやな気がした。できることなら、このまま帰つてほしい、といったかつた。

しかし、そうはいえなかつた。もし相手が目の前にいる副田邦子と名のつた婦人でなければ口に出せたかもしれないが、

「どういうご用件でしょうか？」

とつい問いかえしてしまつたのだ。

「あの……」

邦子はためらつていた。じつさい廊下では立ち話もで

きなかったが、といって、彼の部屋はとうてい人を迎えるような状況ではなかった。いちおう片付けたとはいっても、電気掃除器はそのままになっているし、新聞や郵便物は机の上に積んだままだった。

「弱りましたね。じつはいま旅行から戻ったばかりで、ものすごくちらかっているのです。上がっていただくような状態ではないのですから……ちょっとお待ち下さい」

三郎は、ベランダに面した部屋へ行き、そこから通りを見下ろした。彼が夕食をたべたりコーヒーをのんだりしているスナック「モア」の灯が点っているかどうかを確かめたのだ。それから彼はストーブの火を消し、

「この先に、行きつけのスナックがありますから、そこへ参りましょう」

と副田邦子にいった。

「とつぜんお邪魔して、本当に申し訳ございません」
と彼女は頭を下げた。

「いや、いいんですよ」

そう答えた自分が、三郎は何となくいまいました。相手は春川の紹介状を持ってきたというのだ。こんなふうに応待しなければならぬ義理はないのである。

それどころか、三郎は、春川に対してある種の疑惑をいまでもぬぐいきれずにいるのだった。香代子がとつぜん去ったことに、春川が存在が関係しているのではない

だろうか。

別にはつきりとした証拠があるわけではなかったが、疑うに足る状況証拠とでもいうべきものは、いくつかあったのだ。

三郎は、先に立って階段を下りながら、それにしても春川はどうしてこの品のいい女性を紹介してきたのだろうか、と不思議に思った。勤めていた私立高校を退職してから三年になるが、その間、一度も会っていないのだ。また、いまの住居に変わったことも、春川には知らせていないはずである。もつとはつきりいうなら、知らせる気にもならなかったのだ。

そう思うと、三郎はにわかにはうしろから尾いてくる副田邦子のことが気になった。

「あの……」

まるでそれを待っていたかのように邦子が、
「恐れ入りますが、もう少しゆっくり歩いていただけません？ わたくし、息切れしてしまつて」
といった。

じつさい彼女は息をはずませていた。三郎の足がひとりでに速くなっていったらしい。

「これはどうも失礼」

しかし、残り数歩で目的地のスナックに達し、自動ドアが開いて二人を迎え入れた。

入口に近い席に對い合つて腰を下ろすと、マスターの